

令和2年度（第42回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 令和2年8月30日(日)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

はじめに

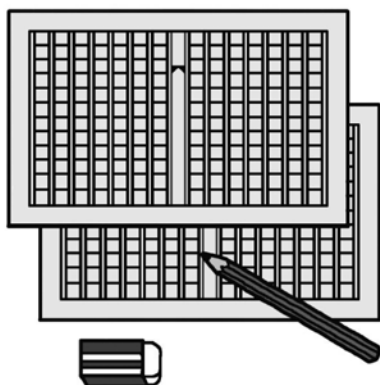
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々に支えられ、今年で四十二回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の手紙でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区の三地区から選ばれた十二名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十二名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろのようによく考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



もくじ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

本当の日本文化を伝えるために

金沢大学附属中学校 三年 緒方 杏菜……………3

優秀賞

言葉

石川県立金沢錦丘中学校 三年 田原 涼夏……………4

「ありがとう」を世界へ

かほく市立高松中学校 三年 岩田紗悠梨……………5

奨励賞

私たちの使命

野々市市立野々市中学校 三年 石田はるな……………6

僕の心の整え方

加賀市立山中中学校 三年 奥村 奏太……………7

私たちに必要な力とは

加賀市立錦城中学校 三年 深田紗弥歌……………8

変わることができたなら

かほく市立宇ノ気中学校 三年 數馬すずか……………9

差別について

小松市立安宅中学校 三年 山川 慎司……………10

自分とうまく付き合う

加賀市立片山津中学校 三年 本岡 怜那……………11

「思いやりのキャッチボール」を、皆と

金沢市立兼六中学校 三年 吉田 玲花……………12

リスパクトマイセルフ

金沢市立野田中学校 三年 北村 忠彰左京……………13

人の笑顔は幸を呼ぶ

津幡町立津幡中学校 三年 坂本 篤紀……………14

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査委員講評……………15

石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長 嶋 耕二

◎少年の主張石川県大会概要……………16

◎石川県大会審査基準……………17

◎地区大会概要……………18

◎第42回少年の主張全国大会

「わたしの主張2020」 内閣総理大臣賞受賞作品……………21



私のいとこはフランスと日本のハーフです。日本語を完璧に話すことができませんが、日本で暮らしたことはありません。「母の祖国についてもっと詳しく知りたい。」という彼女の希望から一ヶ月間日本と一緒に過ごす機会がありました。いろいろなところに出かけ、たくさんを経験をしました。私は一人っ子なため、お姉ちゃんができたようでもとても嬉しかったです。空港で彼女と別れる直前までは。私は名残惜しくてこんな冗談を言いました。「ねえねえ、日本で働いたらどうみなみちゃん日本語話せるじゃん。」すると彼女はいつになく真剣な顔でこう言いました。「いい考えだね。だけど、お辞儀をしたくないから日本では働けないよ。意味もなく頭を下げるなんて私は嫌だよ。」衝撃的でした。「意味もなく？ お辞儀が？」私は、自分自身の耳を疑い彼女の顔をじっと見ました。彼女は本気でした。

その日から、彼女の言葉が頭から離れませんでした。私たちは本当に意味もなく頭を下げているのでしょうか？

考え抜いた末、彼女は日本語を話すことができるにもかかわらず、日本文化の本質を理解していなかったのではという思いに至りました。だから「意味もなく頭を下げるお辞儀」と言ったのかもしれない。すれ違いざまの会釈、電話越しの見えない相手へのお辞儀、卒業式での恩師への最敬礼。これらには、親しみや敬意などの意味が込められています。私たちは、無意識のうちにそれらを感じたり、身近な大人に教えてもらってきました。しかし、日本文化に詳しくない人にとって自分自身で気づき、理解するということは困難でしょう。だからこそ、私たちは日本文化の本質、奥深いところ、それに加えて私たちが当たり前と感じていることをより一層発信する必要があると思います。

今の私にできることはなんだろう。その答えをみつけるため、身近な人に相談したり、ネットを中心に様々な情報を探してみました。そして、今三つのことに取り組んでいます。

一つ目は、他の言語を話せるようになること。日本文化に興味があ

る人の全員が日本語を話すことができるとは限りません。そこで、私は英語とスペイン語の学習に力を入れています。語学の勉強は大変で投げ出したくなることも多々ありますが、そんな時は「日本文化の奥深さを世界中の人に知ってもらおうんだ。」とゴールを思い出しモチベーションを上げています。努力を重ね今年の三月に英検一級に合格しました。

二つ目は、自分自身が金沢、石川県について学校での取り組みを通して詳しくなること。私の通う金沢大学附属中学校では、石川の伝統文化について調べています。この夏には調べた内容、そして石川県をより良くするための提言を発表します。この活動を通して、地元石川の文化について自信を持って説明ができるようになりました。

三つ目は、実際に日本文化を発信すること。私の家族はこれまでに何名かホームステイの学生を受け入れてきました。今年は石川県が主催するオンラインランゲージテーブルに参加します。これは、日本語を学んでいる大学生とオンラインで交流するというプログラムです。中学生の私にホストとして活動するチャンスをおくださったことにとっても感謝しています。その責任の重みを実感し、日本文化の本質を正しく積極的に伝えることを心がけています。

この三つの活動は、今後もちろん続けていきます。世界中の人に私の大好きな金沢、石川、そして日本の文化の奥深さ、本質を正しく理解してもらうために。そして次にいとこに会ったとき、「意味もなく頭を下げるお辞儀」なんて言わせません。





小さな頃からおしゃべりが大好きでした。話を聞いてほしくて、いつでもどこでもお構いなしに話し続け、家族を困らせるほどでした。小学生になってからも、友達との他愛もないおしゃべりは、私にとつて一番楽しい時間でした。

そんなある日、知り合いの上級生が私に向かってこう言いました。「キモッ。」またあるときから、友達に距離を置かれるようになりました。茶化すように言われた「ゴメンね」は、鋭利な刃物となり、私の心を傷つけました。なぜこんなことになってしまったのでしょうか。実は、私の拙い言葉が、いつの間にか周りの人を不快にさせていたので、私は今までに自分が発した言葉を後悔し、壁を作って多くの人がから逃げるようになりました。おしゃべりが好きだった私は、もうどこにもいませんでした。

こんな日々を過ごすうちに、言葉は人を傷つける凶器だと思いううになりました。「私も些細な言葉で誰かを傷つけているかもしれない。」そう考えるほどに、言葉を発することに對して臆病になっていきました。

しかし、そんな私を救ってくれたのもまた言葉でした。「いま君の世界が辛くて泣きそうでも、それさえも『プレゼント』だったと笑える日が必ず来る。」これは、当時私がよく聞いていた曲の歌詞です。この言葉は、私に元気をくれました。「言葉の大切さに気づいた辛い日々も私へのプレゼント。前を向いて歩んでいけば今よりも楽しい未来へ言葉が導いてくれるかもしれない。」そう気づかせてくれました。

このような経験をして、私は言葉に魅了されていきました。そして、素敵な言葉たちを常に身近に感じていたくて、小さなノートに書き留めていきました。その小さなノートに果てしなく広がる言葉の世界。私を傷つけていた言葉が、私にとって光となり、道標となりました。それでも、小学生の頃の心の傷は深く、正直な言葉を口にすることはなかなかできないままでした。

このような日々が続く中、去年の夏、習い事のクラシックバレエの発表会が行われました。私は同じクラスの十人、特別講師の先生とともに、意見を出し合って作品を作ることになりました。全員が発表会を楽しみにしていました。しかし、なかなかうまくいきません。私たちは失敗を恐れ、自分の意見を伝え合うことが全くできていなかったのです。そんなどうしようもない重い空気を変えたのは先生の一言でした。「踊りは足を上げて回ることを極めることではなく『対話』だ」と思っている。

私たちはこの言葉を聞いて変わろうとしました。今変わらなければ何か本当に大切なことを見逃してしまふ気がしたからです。きちんと自分の言葉で伝える。すると、みんなが一緒になって考えてくれるようになりました。いつしか私は、自分の考えを発信することが怖いと思わなくなっていました。踊りだけでなく、私自身を成長させてくれたこの日々は、みんなの「対話」が形となった、バレエの最高のパフォーマンスで幕を閉じました。

「言葉は人を傷つける凶器であり、人を守る武器であり、人を癒やす薬である。」この言葉は、いつでもどこで聞いたかも今では思い出せません。しかし、多くの言葉と出会い、真剣に言葉と向き合ってきた私、今一番大切にしている言葉です。私はこれまで言葉について、様々なことを考えてきました。凶器としての怖さも、武器としての強さも、薬としての優しさも知っています。だからこそ、私は誰かを傷つける言葉ではなく、癒やす言葉を使える人になりたいと思います。そのために、これからたくさん言葉に出会い、発信することにも臆病にならないようにしていきます。

考えてみてください。あなたにとって、言葉とは何ですか？





你好。大家好吗。

「自分の正体を知られるのが怖い。」私はいつも怯えていました。なぜなら、私の母は中国人だからです。母は日本語を上手く話すことができます。カタコトで変な日本語を話してしまうこともあります。そんな母を見てあざ笑う人たち。どこへ行っても同じでした。いつも周りの人との間には、高くそびえ立つ壁がありました。私は「母が中国人だ」ということをだんだん隠すようになりました。

今年の四月頃、私は母と一緒に近所の店にご飯を食べに行きました。母がメニューを頼み終えて運ばれてきたのは、なんと使い捨ての皿の上に載せられた冷めきった料理。それから店の人が私たちに向けて冷たい視線。周りにいたお客さんのテーブルを見ると、私たちとは全然違っていました。ステキなお皿に盛られた料理はともおいしそうですね。ひどい。中国人だからという理由で、こんなに差別されるものだろうか。私は心に釘を打たれたようなショックを受けました。

以前からずっと日本と中国は国際的な面でもあまり仲が良くありません。領土問題や歴史的認識問題など意見が食い違っている問題がたくさんあります。ある日、テレビでニュースを見てみると、領土問題について報道されていました。すると、それを見ていた母は「日本の言っていることは正しくない」と言い始めたのです。けれど、日本人である父は「日本の言っていることは正しい。中国が間違っている。」と口論になってしまいました。私の家ではよく、日中の国際的な問題をめぐってけんかが起きてしまいます。私は、このように日本と中国の仲が良くない事が両国の対立を生じさせることになり、差別が起こるのではないかと考えました。

私の母は今までたくさん差別を受けてきました。文化や使っている言葉が違うということだけで無視されたり、にらまれたりもしました。でも母は逃げずにさまざまなことを耐え忍んで私を育ててくれました。「こんなに大変な思いをして、日本から逃げ出したいとは思わなかったの。」と私が聞くと、母はこう答えました。「大切な家族がい

るのだもの。私よりも苦しい思いをしている人が世の中にはたくさんいるからね。」と。私はこの言葉を聞いて感動しました。とても大切なことに気づかされました。世界には差別によって苦しく辛い思いをしている人がたくさんいるということです。私は胸が苦しくなりました。同じ人類なのに肌の色が違ったり、容姿が違ったりするだけで、偏見を持たれたり敵視されたりします。果たしてこれは平和な世の中であると言えるのでしょうか。このままでいいわけがありません。私は「差別がない社会をつくりたい。」と思うようになりました。

そんな「差別がない社会」を作り上げるために私たちができることは何でしょうか。私は相手に「感謝」することが一番大切だと考えます。例えば喫茶店で友達と話をするとき。帰りぎわに「今日は話を聞いてくれてありがとう」という気持ちで、立ちやすいようにイスを引いてあげます。その行動に友達が感謝する。このように、感謝の気持ちを行動に表すことによってお互いが心を開き、尊敬し合えるのではないのでしょうか。世界中の人々が感謝し合うことでみんなが温かい気持ちになると思います。だれも嫌な思いをせずこの世の中から「差別」が消えていくと思います。

私は今まで現実から逃げていました。ずっと自分は日本と中国のハーフであることを隠してきました。でも今は違います。「差別」という残酷な現実に向かかっていきたいと思っています。私は中国語を話すことができます。日本と中国のハーフで中国語を話せるということを生かして社会に貢献していきたいと思います。

愿这个世界幸福。这个世界が幸せでありますように。





私たちは、なぜ学校へ行くのだろうか。学校といえば、勉強するところという印象が強い。確かにそうだが、私は、勉強するためだけに行っているのではないと考える。そう考える理由は二つある。

一つ目は、学校行事や集団行動を通して、様々なことを感じたり、学んだりした経験があるからだ。例えば、部活動での経験だ。私は女子バスケットボール部に所属していた。練習中、他の部員と意見が合わず対立してしまったときがあった。心がバラバラになると当然プレ―もうまくいかない。その後、自分の意見をただ押し付けるのではなく、相手の意見に耳を傾けることも大切なのだと気がついた。また、仲間とともに、「勝ちたい」「もっと上手になりたい」などと、ひとつの目標に向かって努力することの楽しさも身をもって知った。しかし、これらのことを感じたり、学んだりできたのは、全て「仲間」がいたからこそである。そもそも、「仲間」がいなかったらできなかった経験なのだ。このことから私は、自分一人ではなく、仲間と共に学び合い、成長するために学校へ行くのだと思う。

二つ目の理由は、学校へ行くことが、私にとって一番の楽しみだからだ。今年の四月、新型コロナウイルスの影響によって、突然、学校へ行くことができなくなった。石川県でも緊急事態宣言が発動され、多くが自宅待機を余儀なくされた。このことにより、中学生の私たちも「学校」という存在について深く考えさせられたのではないだろうか。二カ月間の休校により、授業もストップ。学校からの課題に一人で取り組む日々の中で、楽しみにしていた行事がなくなったり、友達に会えなくなったりと、当たり前だった日常が当たり前ではなかったことに気づかされた。それと同時に、自分にとって「学校」が「生きがい」のようなものであることにも気づいた。学校へ行けば、友達がい、一緒に話したり、一緒に笑ったりできる。それが、私にとって一番幸せな瞬間だ。私の周りには、勉強するため以外の理由で学校へ行っている人も結構いる。だから、学校へ行く理由が必ずしも「勉強するため」に限定されなくてもいいと思う。

しかし、世の中には、貧困や紛争などが原因で、学校へ行って勉強したくてもできない子供が大勢いる。ユニセフによると、二〇一七年時点で一億二三〇〇万人にもほるそうだ。彼らにとって、何の自由もなく、十分な教育を受けられている私たちは、とても羨ましい存在だろう。このことを知り、勉強が「面倒臭いな」と思っていた自分が恥ずかしくなった。ここでも、学校へ行って勉強できることは当たり前ではないことを知った。むしろ、いやいや勉強するのではなく、感謝して勉強に励もうとさえ思った。また、自身のこの小さな変化が、学校へ行けない子供たちの願いを叶える第一歩につながるのではないかと感じた。

学校へ行く理由――。総じてそれは、これから先の人生を豊かにするためにだと、私は考える。学校へ行けば、仲間とともに学び合い、成長することができる。だが、これが当たり前ではないことを忘れてはならない。学校で感じたことや、学んだことを全てを、これから先の人生に最大限活かすことが私たちの使命ではないだろうか。残り僅かとなった中学校生活。部活動にも一区切りついた今、次なる学校での目標は、運動会の成功、そして受験である。コロナ禍の中、「新しい生活様式」という言葉も出てきてはいるが、まずは学校に行くことができることに感謝し、目の前の自分にできることを限界まで挑戦し続けようと思う。未来に向かって。





中学校生活は楽しい。大好きな部活も、友達とバカ笑いをするときも、かけがえのない時間だ。だけど、孤独な時間も多くなった。なぜだろう。些細なことで思い悩み、周りの目がとても気になる。怒りっぽくなったり、「どうせ…」と後ろ向きになったり。「自分だけが変わっているのだろうか？」と自問自答する。心がざわついていてなのだ。

そんなとき、「心を整える」という言葉を耳にした。僕はその言葉にとっても興味を持った。心を整える＝自分の感情をコントロールすること。今の自分には、これが必要なのではないかと強く思った。世の中では、自分の心をコントロールできないために、トラブルや事件になってしまふことがよくある。自分自身で「心を整える」ことは、僕たちが大人になるための責任であるとも感じる。今、中学三年生である「僕の心の整え方」を皆さんにお伝えします！

一つ目は、自分の好きなことやお気に入りを見つけることです。読書、スポーツ、絵を描くなど、周りにはさまざまな趣味を持つ人がいます。僕の場合は、好きな曲をピアノで弾くことや、イライラしたときに思い切り素振りをする事です。人には一人ひとり違ったやり方があるのです。「オタク」という言葉がありますが、人に迷惑をかけるに限り、自分の好きなことを見つけ、それに没頭できることは、その人の才能であり、強みであると僕は思います。

二つ目は、人の言葉を力にすることです。僕の制服のポケットには、いくつかの紙が入っています。一つは、小学校の卒業式のときに担任の先生からもらった学級だより。そこには、「『ピンチはチャンスだ。ありがとう！』この言葉をみんなに贈ります」と書かれています。もう一つは、中学生になってから全校集会で校長先生が紹介してくださいました新聞記事。どれもとても心に残っているので、いつも持ち歩いてます。最初は、そんな素晴らしい言葉を思い出すだけで力になると思っていました。しかし、僕はこんな経験をしたことがあります。負けられない試合、僕はマウンドに立っている。ノーアウト満塁のピンチ。僕の心は乱れる。そんなとき、顧問の先生の「自分一人で背負うな。仲間を信じる！」という言葉が心の中に響く。その言葉とともに、

何度も練習で先生に怒鳴られたこと、暗くなるまで仲間と頑張った自
主練、負けて流した悔し涙。それらの記憶と先生の言葉が、一本の線
でピタッとつながる。空気が止まっているようだ。よし、僕の心は整
った。

人は、心を動かされる言葉に出会うことがあります。それは、所詮
人の言葉にすぎません。でも、その言葉と自分自身の経験がピタッと
結びついたとき、それは自分の力に変わるのだと思います。新型コロ
ナウイルスによる休校中、やりたいことができず自暴自棄になりそう
だったとき、「ピンチはチャンスだ、ありがとう！」この言葉は、僕
を何度も奮い立たせてくれました。

三つ目は、自分を好きになることです。昨年、職場体験で保育園へ
行ったとき、園児たちに気付かされたことがあります。園児たちはか
けっこをするとき「速かったでしょー!」、ゲームをするとき「上手だった
でしょー!」と僕に聞いてきました。やる気、笑顔、そして自信に満ち
溢れているのです。そんな素直な姿に触れたとき、僕は頑張ったり、
やり遂げたりした自分をもっと認めてもいいんだと感じました。自分
を認めることができる、自然と周りを受け入れることができます。
そんなとき、僕の心は穏やかで整っているのです。

今、僕が考えていることは、本当に小さなことかもしれませんが、だ
けど、自分の心を整え、広く周りを見る
ことができるようになることが、僕らが
大人に近づく一歩だと考えます。

僕は将来、中学生や高校生にものを教
えたり伝えたりする職業に就きたいと思
っています。今、この中学時代に悩み、
苦しんだちっぽけなことを本気で伝え
たり、相手の悩みや言葉を本気で受け止
めたりできる、そんな大人に僕はなり
たいです。





私たちに必要な力は何だと思いますか。学力、運動能力などさまざまなことを私たちは学校生活や家族との関わりの中で学んできています。もちろん、どの力も大切ですが、私たちに特に必要な力は、「伝える力」だと思います。

私は小学校二年生の頃からミュージカルを習っています。ミュージカルは演技、歌、ダンスの三つが合わさり、一つの舞台となります。この三つのうち、どれが欠けても成り立ちませんが、お客様に感動を与えるためには、それぞれの技能に、表現力、特に、伝える力を加えなければいけません。演じる役柄の悩みや怒り、苦しみ、そして喜び。役を通して感じた自分の思いを一生懸命伝える姿こそが人の心を動かします。これは舞台上に限られたことではなく、自分の意見を伝える場でもすごく大切な力だと思います。

昨今、コロナウイルスの影響で今まで当たり前前にできていたことができなくなっています。ミュージカル活動もその一つです。毎週東京から来ていただく講師の先生とも、加賀の劇団員とも会えず、学校にも行けず、という状況が続き、私はイライラが募っていました。

そんなある日、ようやくリモートで自主練習をすることになりました。喜んだのもつかの間、初のリモートで電波の悪さに伴うコミュニケーションのとりづらさ、話す間やまとめることの難しさなどにより、小さい子たちはほとんど集中力が落ちていきました。そんな中、中高生の年長者は、問題を把握する間もないまま、時間だけが過ぎ、みんなの表情は暗く、あんなに楽しかったミュージカルの活動とはかけ離れた状況になってしまいました。私はいくつかの問題点に気づいていたにも関わらず、伝えることができなかつた自分が悔しく、自分を責めました。私自身まとめ役としてのプレッシャーもあり、ミュージカルの活動において以前より気持ちが離れていくような気がしていました。

そんな時、私のモヤモヤした気持ちを察してくれた劇団員の一人が、年長者のグループチャットで意見をしてくれました。

「まとめ役はみんなのことをよく見て、それぞれにコミュニケーションをとって、楽しくできるように。技術を高める内容よりも、楽しむことに重点をおいて、時間も短くすればどうか。」と。私やみんなに配慮しながら優しく真つすぐに伝えてくれたのです。

その友人の言動により、私の心も軽くなり、助け合える友人がいる劇団の活動を続けていきたいと思えるようになりました。私が前向きになったことで周りの雰囲気も明るく前向きになったように感じます。そして、自分自身の伝える力を磨くことの大切さを改めて感じました。

これからはAIが発達し、さまざまなことが便利になるでしょう。そんな中、私たちに求められるのは「表現力」、特に、相手に「伝える力」ではないでしょうか。

「伝える力」。自分は今どう思っているか、伝えたいことは何なのか、具体的に考え、伝える場や聞いてくれている相手のことを思いやっけて伝える力。それを磨くことで、日常生活はより豊かに大きく変化すると思います。私たちの小さな一歩を積み重ねて、より輝く日々にしていきたいと思います。





奨励賞 変わることができたなら

かほく市立宇ノ気中学校 三年 數馬 すずか

皆さんは、加害者の人権について考えたことはありませんか。加害者となった人、罪を犯した人は法律に基づいて裁かれ、それに見合った罰が与えられます。といっても、刑務所には住むところも食べるものもあるのです。しかし、被害者となった人はどうでしょう。失われた命が回復することはありません。一度負った傷もいえるには多くの時間を要します。ここで私たちはある矛盾に気づくはず。なぜ、加害者に人として生きる権利があるのか、ということに。私はかつて、加害者に人権など必要ないと思っていました。しかし、ある経験を通してこの矛盾を解くヒントを与えられました。そして、自分が加害者となることで体当たりで気づかされた経験が、私の夢の最大のきっかけとなっているのです。

小学五年生のとき、人間関係で悩んでいた時期がありました。同級生の四人で過ごすことが多く、初めはただ純粹に一緒にいられることが幸せだと感じていました。しかし、当時は思春期だったためか、水面下での思いのすれ違いが日に日に起こるようになってきました。そしてついに、日々の我慢が限界に達したのか、四人のうち二人が喧嘩をしてしまいます。私を含めた残りの二人も何となくそれぞれの腰巾着となり、二対二となる日が続いていました。そんなある日、相手がどう思っているか気になるだろうと思い、私は一緒にいた子がこぼした愚痴を本人に伝える、告げ口という行動をします。勿論悪い事をしていくつもりはなく、むしろ良かれと思ってとった行動でした。しかし、この告げ口のせいで二人の関係は更に悪化。私は無意識のうちに加害者側に立ってしまったのです。こんな大事になるなんて、私のせいだ。毎日のように自分を責め、私はなんて悪い人間なんだとひたすらに感じていました。そんな時、相談に乗ってくれた担任の先生が私を変えようと言葉をかけてくれました。「自分が悪い人間なんて言うのはだめ。生まれたときは皆同じ赤ん坊なんだから、善い人も悪い人もないでしょ。それにあなたの失敗一つでああなたの未来が全て否定される訳じゃない。変わればいいの。」当時まだ十一歳だった私には少しばかり重い言葉でしたが、確実に心に響いていました。この言葉をきっかけに、私は自分の失敗と向き合い、反省し、友達との関係を改善する

ことができました。そして、ただの小学生のトラブルではなく、非常に重い事として応え続けています。

私はこの経験を通して、気づかぬうちに自分が加害者になりうることに、生まれながらに善い人、悪い人はいないこと、そして失敗を通して変わることができたなら、未来は開かれるということなどたくさんことに気づかされました。人という存在自体に善悪があるのではなく、善悪の判断を誤ることで被害者加害者という立場が生まれてしまうのだと考えるようになりました。失敗は誰にでもあること、私たちは機械ではありません。だからこそ、一度加害者となっただけで、その人を悪と決めつけ、未来を全て否定する以外の方法を見出したいと思っています。そんな野望を持つ私の将来の夢は、弁護士になることです。弁護士には、被告人の権利を守る役割があります。その中で、自分の犯した過ちに責任をもってもらおうとともに、犯罪者として孤立してしまった人たちにやり直すための手を差し伸べられる、そんな弁護士になりたいです。

このように、誰もが加害者になりうる世の中に私たちは生きているのです。だからこそ、加害者となってしまった人にも人として生きる権利を与え、社会に復帰するチャンスを示しているのだと考えるに至りました。決して、加害者に同情しろと言っている訳ではありません。もし自分が被害者や被害者遺族となった場合、加害者を一生憎むというのも仕方ないと思います。それでも加害者が変わろうとしているときには、背中を押してあげるといふ周りの人の支援が必要なのではないでしょうか。一度の失敗で、一生「犯罪者」という肩書きを背負っていくことは、本人だけではなく、家族や友人にとっても辛いことなのです。「生まれたときは皆同じ赤ん坊。」皆さんにもこの考えを忘れずに生きていてほしいです。





「ブラック・ライブズ・マター」

五月十五日、白人警官に、膝で首を八分四十六秒もの間圧迫され、一人の黒人男性が亡くなりました。

「黒人の命も大切だ。」

この事件をきっかけに起きた抗議デモ。このニュースを見て、私も「差別問題」について関心を持つようになりました。私の学校のALTの先生が、以前社会の授業でこの問題について教えてくれました。

「アメリカでは、肌の黒さによって差別をうけるだけでなく、それが進学や就職にまで影響している。」

と。私はこれに強い違和感を覚えました。肌の色に関係なく、人は平等なはずではないでしょうか。

「ブラック・ライブズ・マター」

私は、このニュースに触れるにつれ、これは海外の話ではなく、私たちにも身近な問題だと感じるようになりました。

どうして差別はなくならないのでしょうか。あからさまに人を差別するような人は、ふつう、きらわれます。それに、差別がいけないというのはみんなが思っていることでしょう。それでも、なくならないということは、それだけ差別があたかも正しいものとして、うまく心の中に忍び込んでくるからです。

まず「差別」では、立場の弱そうな人に目をつけます。そして、弱点や特徴を見つけて、みんなも同じように思うだろうと周囲の人に話を広げていきます。その空気がやがて全体の空気になります。「黒人だから、暴力的にきまってる。」というように。「みんなが言うから、そうなんだろう。」という空気ができると、なかなか正しいことが言いだしづらくなってしまいます。

今、中学生の私にとって一番身近な「差別」は「いじめ」です。大きな人種差別問題も、私たちの身近にある「いじめ」という問題も、とても良く似ている気がします。

小学校のころ、私もクラスの人にかかわられていました。当時の私

は太っていて、クラスの人から「デブ」や太っていることを指すあだ名などで呼ばれていました。当時のクラスでは、私のことを気遣ってくれる人もいましたが、大半の人は見て見ぬふりをしていました。みんな、からかっている人に逆らうと、次は自分がからかいのターゲットになってしまおうという雰囲気があったからです。

どうしたらこの雰囲気を変えていけるのでしょうか。まずは、おかしいことを見逃さない気持ちが大切だと思います。なんとなく雰囲気や巻き込まれるのではなく、自分で正しいことを判断し、行動に移していかなくはいけません。真正面から立ち向かうことができなければ、同調しないということもまちがっていることを表す意思表示になると思います。そして、困っているような人がいたら目をかける、声をかけるといことです。何よりも大切なことは、一人ひとりに特徴や個性のあることを知ることだと思います。みんなそれぞれ違った見たい目や考えを持って生きています。その違いを差別の材料にするのではなく、その人の個性として受け入れることが必要だと思います。

私は、自分の身近なところにある差別に敏感になり、人の個性を受け入れて関わり合える人になりたいと思います。

「ブラック・ライブズ・マター」

皆さんも、身近な問題として考えてみませんか。





みなさんは「HSP」という言葉をご存知ですか？「HSP」とは「ハイリー・センシティブ・パーソン」の略で、簡単に言うと、「とても繊細な感性を持つ人」のことです。

私は高度のHSPです。そのことがわかるまで、私は自分の性格が嫌いでした。自分が怒られているわけではないのに、他の人が怒られている様子を見るとつらくなったり、ほんの小さなことで傷ついて、それを何日も引きずったりするからです。

教室で「クスクス」という笑い声が聞こえると、実際はそうではないのに「自分が馬鹿にされているのかな。」と思ってしまいます。その場から逃げ出したいと思っても、授業中はどうすることもできません。みんなは平気そうにしているのに、なんで自分だけ辛いんだろう。そう思っただけで悩み続けました。「なんでこんな変な性格なんだろう。」「なんでこんなにメンタルが弱いんだろう」と自分を責めてばかりいました。

そんな時、偶然見つけたのがHSP診断テストです。最初は「ちょっとおもしろそうだな。」ぐらいにしか思っていませんでしたが、診断テストの結果、自分がHSPである可能性が高いことがわかりました。その後、自分でもHSPのことを調べてみて、いろいろなことがわかりました。強い光や音が苦手な人が多いこと、自分が怒られていなくても他の人が怒られている様子を見たり聞いたりすると、つらくなる人が多いこと、細かい部分に気づく人が多いこと……。自分にびつたりと当てはまっていた驚きました。同時に、安心することができました。今まで私が嫌っていた自分の性格にはちゃんと名前があったので、決して変なものではなく、メンタルが弱いわけではなかったんだとわかりました。

そのことがわかった時、HSPは悪いところだけでなく、むしろいいところがたくさんある、と自分で気づきました。私は、友達に、「怜那ってこっちはつらい時に、そっとしておいてくれるよね。」と言われたことがあります。細かい部分によく気づくので、誰かが困って

る時に、いち早く気づいて助けることができるということです。また、HSPの人は感性が豊かなので、絵を見たり音楽を聴いたりしたときに、より感動することができるということにも気づきました。

特に、細かい部分によく気づくという特徴は、とても役に立っています。私は、今、生徒会の生活委員長をしています。企画を進めるときに、「この日に実施するなら、この日に委員会でも提案しなければいけない」「みんなに知ってもらうためには、明日の給食の放送で呼びかけをした方がいいな。」など、早めに大事なことに気づくことで企画をスムーズに進めることができます。

今でも、だれかの笑い声が気になることはあります。でも、その時に「自分は、HSPという性格なんだから、こういうものなんだな。」と割り切れるようになりました。以前のように「なんで自分だけ。」と悩むことはなく、心を楽にすることができています。

HSPは病気ではなく、持って生まれた性格のことです。ずっと変わらないものだからこそ、うまく付き合っていく必要があります。自分の繊細な性格を嘆くのではなく、逆に人よりたくさんものを感じられることを嬉しいことだと思っ、一日一日を過ごしていきたいです。





奨励賞 「思いやりのキャッチボール」を、皆と

金沢市立兼六中学校 三年 吉田 玲花

満員電車の中、交通渋滞の中。「ああ、今日は大切なお客さまとの約束があるのに、これでは遅刻だ。どうしよう。」

突然ですが、あなたがこんな状況に直面したとします。この時、あなたはどのような気持ちになるでしょうか。不安や焦りを感じ冷や汗を流すかもしれません。しかしそのお客さまが、笑顔で出迎えてくれたらどうでしょうか。

「出迎え三步、見送り七歩」私がこの言葉を知ったのは、道德の授業でのことでした。

この話は、筆者が仕事で人に会う際に遅れてしまうところから始まります。急ぎ足で近づくと、ホテルの玄関口に立っていた相手は、笑顔で二、三步歩み寄ってきたのです。筆者は胸をなで下ろしました。その後話を済ませ筆者が帰る時も、相手はあとについて見送ろうとすのでした。筆者は相手の持つ「もてなし」の極意に、深く感銘を受けました。

私はこの話で、筆者を思いやるさりげない行動に、日本人らしい良さを感じました。最初に考えたように、遅刻などのミスをしてしまった人の心の中は、不安でいっぱいです。しかし、そんな人の気持ちをそっとくみとり、緊張をほぐしてあげること。日本人はきっと、遙か昔からこのように「相手を尊重する姿勢」を大切に、より良い関係を育もうとしてきたのでしょう。

しかし「そんな些細な気遣いなんて無くても変わらない。」そう考える人もいるでしょう。実際に私もその一人でした。けれど、その考えはある経験によって覆されるのです。

五年前、カナダへ観光に行った時のことです。水を買いにコンビニへ行きました。そこで、店員さんの挨拶も笑顔もない、商品を台にドンツと置くような、日本とは正反対の対応にとてもショックを受けました。しかし、それは外国では当たり前のことなのです。この時私は、改めて感じました。今まで当然のように受け取ってきた優しさは、当たり前ではないこと。そして、日常に溶け込む小さな思いやりの温かさを。たとえどんなに小さかったとしても、それは必ず人々の笑顔の源になっていたのです。

それから私は、日々の中に日本の「気遣い」の文化を探すようになりました。季節によって温度の違うおてふき、玄関やトイレに挿された一輪の花。何気ない瞬間にも、人の優しさは身の回りにあふれているのです。それに気づいてからは、私は気を「遣われる側」から「遣う側」へと変わりたいという気持ちが大きくなっていきました。そんな中、私は一人の女の子に出会いました。

中学生になった私は、上下関係を重んじるハンドボール部に入りました。そのため、先輩の要求にすぐに応じられるよう、常にアンテナを張っておく必要がありました。しかし、自分のことで手いっぱいなのに、他の人に気を配るといのはなかなか難しく大変なことでした。けれど唯一、その女の子は誰よりも早く先輩やチームメイトの異常に気づき、てきばきと行動していくのです。

何が彼女の気配りのアンテナを敏感にさせているのか。それは「人をよく見て、よく知ろうとしている」ということです。あらゆることに興味を持ち、それらを大切にしようとする心。それこそが「気遣い」に欠かせない要素なのではないかと感じました。

このように、「気遣い」は、相手に興味を持ち、もつとよく知ろうとすることから始まります。そしてそれは、どんなに小さなことでも人々を笑顔に、温かい気持ちにします。すなわち「相手を尊重する姿勢」が「気遣い」の核なのです。グローバル化が進む現代社会。その中では、差別や偏見も決して少なくはありません。しかし、日本のもてなしの文化のように、相手をお互いに「気遣う」ことができれば、優しい気持ちは自分から周りへと広がっていきます。これは同時に「思いやりのキャッチボール」にもなりうるのです。より良い社会のために私たちができること。まずは身の回りにあふれる優しさに感謝して吸収し、自分から「思いやりのキャッチボール」を始めてみませんか。





「人権を尊重しよう。」

これは、他人をリスペクトしようと同じ意味だと考えています。しかしながら、もしかしたらそれだけでは十分とはいえないのではないのでしょうか。

私は、今回の三か月間に及ぶ新型コロナウイルスによる休校期間中、もう一つ大切な点をここに付け加える必要があると実感していました。それは、他人をリスペクトするのと同じくらい自分自身のこともリスペクトする大切さでした。

当たり前に学校に行っていた習慣がある日突然、ストップしました。この間、ウイルス感染の恐怖以上に、曜日感覚もなくなって、家と学校、オンとオフの区別ができていた生活がなくなり、いつもは友達とふざけあつたり喋ったり、楽しい時間を過ごして大勢の中にいる自分が当たり前だった生活が急に消えてしまいました。

SNSを使って会話はできていましたが、直接に会えない状態が長く続いて、私は、家の中で宿題をこなしながら、「本当にこれで合っているのか、ペースは大丈夫なのか、みんな何しているのか。」と、不安を感じて、寂しい気持ちでいっぱいになることがたびたびありました。

誰かが私を無視したわけではないのに。

そのとき、ああ、私は大勢の友達との関わりがあるからこそ、今、孤独を感じているのだと再認識しました。

無視された、ひどいことを言われたなど、いじめ問題は、無人島では起こりようがなく必ず、人が集まった場所では起きないことではないでしょう。

私はいじめで無視された辛い思いをしている子の疑似体験をこの休校期間中、少し味わったような気がしました。人の気配を感じるからこそ、孤独がより辛いものになってしまうのです。

沢山の人間が集まってくる学校という世界は、自分一人しか住んでいない無人島とは違います。また、たくさん人間が集まっているからといって、その全員が自分と全て同じではなく、容姿、性格、育ってきた環境、好き嫌い、主義主張叶えたい夢、成績など様々な違いがあり、自分のクローン人間の集まりではないのです。それは、みんなわかっていることです。

しかし、自分と違う人間がたくさんいるから生じる面白さを話題にするより、ついつい「あいつは浮いている」、「空気読めない」という

表現を用いて、些細な違いを問題視し、全体の同質化を求めようとしがちです。

このように考えるのは、私が小学校五年生の終わりからの一年間、ニュージージーランドに住んで、地元の中学に通っていた時に、様々な種類の友達が様々な考え方をしていたことを、この身で感じて考えてきたからではないかと思えます。特に、違いを認めて相手をリスペクトするということはよく学びました。

自分が他人と違うということは、恥ずかしいことではなく、むしろ大切にしようによく言われていましたし、私もその考え方が大変納得のいくものでした。

みんな頭ではわかっているはずなのに、普段の生活では、それぞれの違いを認めて、その違いを尊重するということを自然にできているかというとなかなか難しいです。

みんなが見える普段の学校生活が、どんなに安心感に繋がっていたか、休校期間中考えてしまったことからわかります。

それと同時に、まずは、自分をリスペクトしなくてはと考えました。謙遜や遠慮の精神も大切だけれども、必要以上に自分を下げたり、大したことないと決めつけることなく、人と違うという理由だけで自分を軽視せず、むしろよくやっていると、この考えは自分らしいと、まず自分のありのままをリスペクトして認めることで、他人とすべて一緒でなければいけないという強迫観念は、少しずつなくせるような気がしてきました。

自分を軽視しない、自分を悪く言わない、そうやって自分を大切に思える人は、きっと他人のことも本当にリスペクトできる人なんじゃないか、休校期間中、私はこれまでの自分自身を振り返り、今後の姿勢を考えることができたように思えます。

孤独の疑似体験を通じて、他人をリスペクトするのと同様、まずは自分自身を軽視することなくリスペクトし、自然に自分自身を認められる人間でいようと思えました。

だからこそ、今、休校明けに叫びたいのです。

「みんなそれぞれよく頑張った。そして、私もよく頑張ったのだ。」と。





「なんで笑えるんだろう。」一枚の写真を見た時愕然としました。その写真には発展途上国のとある村で生活する子供が写っていて、その子供は黒く汚れた服を着て、壊れたおもちゃを持ちながら笑っていました。過酷な環境にいるのになぜ笑えるのか理解できませんでした。そしてもう一つ不思議なのが日本は発展途上国よりも過ごしやすい環境なのに笑顔になっている人が少ないということです。昔は僕も笑顔を特に意識していませんでした。でもあることがきっかけで笑顔について考えるようになったのです。

中二のとき体育でクラスメイトとぶつかってしまい足をケガしてしまいました。後日病院で診察してもらおうと捻挫と診断されました。その時捻挫は症状が軽い重い関係なくまたケガをする可能性があるためしばらくは体育やクラブチームの活動を避けるようにと言われたのです。しかしあきらめきれなかった僕は、二週間後のクラブチームの大会にケガを負ったまま出場しました。そのこともあり足の痛みと半年近く戦うことになりました。つらい出来事はこれだけではありませんでした。僕が足をケガした日と同じ日に父さんが倒れたのです。父さんの病状は重く二カ月ほど意識がありませんでした。さらに三月になりコロナウイルスが流行し始め、学校は休校になってしまい、思うように勉強できず、友達にも会えない日々が続きました。この時期、僕はつらい出来事が重なり精神的にもかなり参っていました。しかし僕はこの時から笑顔を意識するようになりました。

笑顔を意識するようになったきっかけは、「人の笑顔は幸を呼ぶ」という言葉と出会ったからです。最初は軽く考えていましたが実際に笑顔を意識することで、笑顔の大切さを実感したのです。まず前より楽しく過ごせるようになりました。友達との会話やテレビを観ているときなど意図的に笑うことで笑う回数が増え、日々の生活が明るくなり、心が楽になったのです。このことは科学的にも証明されています。まず、ストレスを軽減する効果があります。またポジティブになる効果や幸福度がアップする効果があるとアメリカの大学が発表しています。

す。笑顔がもたらす効果は精神面だけでなく健康面やコミュニケーションを取る時にも効果を発揮します。健康面というとナチュラルキラー細胞が活性化されます。ナチュラルキラー細胞はガン細胞やウイルスを殺す働きをされていて、この細胞が活性化することで病気になるにくい体になります。それから、笑顔には免疫力アップ・アレルギー改善・心臓病の予防・糖尿病・リウマチの治療などまさに万能薬のような効果があります。僕も体調をくずしがちだったけど笑顔を意識するようになってからは体調をくずすことは少なくなりました。それからコミュニケーションを取る時にも笑顔は役に立ちます。好感度を上げる効果や相手に対して良い印象を残す効果があります。またとある実験では笑っている人の前で厳しい表情をするのは難しいという結果が出ておりその場の空気をおだやかにしてしまいう効果もあるようです。

僕たちが当たり前前にしている笑顔には自分の気持ちを表すだけでなく、精神面や健康面、コミュニケーションを取る時などたくさん場面僕たちを支えていたのです。

もし世界中が笑顔であふれたらどうなるでしょうか。日々悪化していく戦争、人々を苦しめる病気やウイルス、そしてあつてはならない人種差別や誹謗中傷などを減らしたり、やわらげたりすることができるともいけません。笑顔の力は無限大です。一人の力は小さくても友から友へ人から人へつなぐことで笑顔は増えていくのです。コロナ感染拡大がおさまらない今だからこそ笑顔を増やしていきたいませんか？明るい未来のために。



はじめに、新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な取組が行われる中、「少年の主張石川県大会」が開催されることをうれしく思っております。

十二名の皆さん、どの発表も大変素晴らしいものでした。中学生らしく、さわやかな語り口調の中に個性が表れており思いが明確に、しかも豊かに表現されているのを、興味をもって聞かせていただきました。ありがとうございます。

さて今年度、小学校では、新しい学習指導要領による学習が全面的に実施されました。中学校は、来年度から全面的に実施されます。この学習指導要領とは、学校における学習について、どんな内容を、どの学年で、どの程度、そしてどのようにして学習するかを、国が示したものです。

この新しい学習指導要領は、皆さんが社会に出て活躍する十年先の未来を想定して、その未来に必要な資質・能力を学校で身に付けることができるように定められています。皆さんも授業で、自分の考えをもち、友達と対話しながら、学習内容を深めるような学びを経験しているのではないのでしょうか。

ところで、十年先の未来では、どのような世界になっているのでしょうか。近年は社会の変化が速く激しいので、簡単に予想がつかないかもしれませんね。

新しい学習指導要領では、未来に生きる皆さんが、

- ・ 自分のよさや可能性を認識すること
- ・ あらゆる他者を価値ある存在として尊重すること
- ・ 多様な人々と協働すること

などを学校における学びで身に付け、様々な社会の変化を乗り越えられるようになることを目指しています。

今回の「少年の主張石川県大会」における皆さんの主張には、

- ・ 自分の気持ちや日本の文化を言葉を使って伝えることの大切さ
- ・ 自分の長所を見付け、自分を大切にすることの大切さ

- ・ 違いを受け入れ、相手を尊重することの大切さ
- ・ 前向きに過ごすことや感謝して学ぶことの大切さ

などが述べられていました。これらの主張は、新しい学習指導要領にも示されている、未来に生きる皆さんに求められることと一致しており、大変驚いております。

さて今年度は、長期にわたる臨時休校がありました。皆さんは休校中、それぞれの家庭で、自分自身のことや世界の状況を見つめ直すことで、未来で生きるための大切な考えと、行動する目標をもつことができたのではないのでしょうか。

そして、この主張が、皆さんの心を豊かにし、未来のよりよい世界を築くための「気付き」となることを、そして皆さんが、さらに高い志をもって、それぞれの夢や希望の実現に向けて歩まれることを、心より期待しております。

最後になりましたが、発表された皆さん、ご支援いただいた先生方やご家族の皆様、さらには、この大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます、講評といたします。



令和2年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県少年団体協議会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

令和2年8月30日（日）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町 212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞）	1名
優 秀 賞（石川県教育委員会賞）	2名
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞）	9名

9 その他

(1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。

(2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

審査委員

- (1) 審査委員長 大久保 邦彦（石川県市町教育委員会連合会 副会長）
- (2) 審査委員 松下 浩一（石川県小中学校長会 理事）
日高 昇平（石川県PTA連合会 副会長）
芝田 信栄（石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長）
縄 寛敏（石川県少年団体協議会 会長）
嶋 耕二（石川県教育委員会事務局学校指導課 担当課長）

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第39回 加賀地区中学生意見発表大会」

主催 加賀地区市町教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和2年8月10日（月・祝）13:00～

会場 能美市寺井地区公民館 大ホール

審査員 向出 章（小松教育事務所長）

石黒 和彦（加南地区教育委員会連絡協議会長）

谷口 徹（能美市教育長）

笹川 晃（小松教育事務所指導主事）

発表者（17名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
走ることから学んだこと	能美市立根上中学校	2	中川 和優
僕の心の整え方	加賀市立山中中学校	3	奥村 奏太
世界に目を向ける	加賀市立山中中学校	2	山下 莉緒
自分を変えるには	小松市立南部中学校	3	井上 聖徠
小さな努力	能美市立辰口中学校	3	吉原 和輝
私たちに必要な力とは	加賀市立錦城中学校	3	深田 紗弥歌
発信者として	小松市立芦城中学校	2	大谷 綾椛
自分とうまく付き合う	加賀市立片山津中学校	3	本岡 怜那
集団と自分、どっちが大切？	加賀市立片山津中学校	3	南出 明洋
世界の困っている人達のために、 今、わたしができること	川北町立川北中学校	2	橋場 茜
差別について	小松市立安宅中学校	3	山川 慎司
僕にはなにもなかった	加賀市立山代中学校	3	中川 尚輝
臨時休業期間中に考えたこと	小松市立松陽中学校	3	片山 世菜
東京オリンピック・パラリンピック 延期に対して思うこと	小松市立松東中学校	3	城下 慶次朗
病気への「ふつう」の理解	能美市立寺井中学校	3	山下谷 唯
明るい未来について	小松市立御幸中学校	1	有本 典可
祖父がいるから	小松市立板津中学校	2	宮本 真衣

(2) 石川中央地区大会（かほく市、白山市、野々市市、河北郡）

「第30回（令和2年度）少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 津幡町教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 令和2年8月10日（月・祝）13：30～

会場 津幡町文化会館シグナス

審査委員 吉田 克也（津幡町教育委員会 教育長）

永井 隆和（石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡中学校 教頭）

西田 貴子（白山市PTA連合会 事務局長）

清水絵里奈（石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事）

宮崎 禮子（石川県青少年育成アドバイザー協会 会長）

発表者（11名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
私たちの使命	野々市市立野々市中学校	3	石田 はるな
希望の虹	野々市市立野々市中学校	3	森 一乃
私の未来は誰のもの？	野々市市立布水中学校	3	清水 美伶
本当の便利	野々市市立布水中学校	3	高澤 和音
変わることができたなら	かほく市立宇ノ気中学校	3	數馬 すずか
We can be “Challengers”	かほく市立宇ノ気中学校	3	森 滉士郎
「ありがとう」を世界へ	かほく市立高松中学校	3	岩田 紗悠梨
無くしていくべきもの	内灘町立内灘中学校	3	中平 恋姫
捨てられる命	内灘町立内灘中学校	3	濱江 愛音
人の笑顔は幸を呼ぶ	津幡町立津幡中学校	3	坂本 篤紀
障害者を尊重しあえる未来	津幡町立津幡南中学校	3	北山 千奈

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第73回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 令和2年8月19日（水）13:00～

会場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭等

発表者（26名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
「あたりまえ」の日々とは	金沢市立大徳中学校	3	山本 佳歩
「かわいそう」ってどんな言葉？	金沢市立鳴和中学校	3	小阪 倫香
心の声	金沢市立芝原中学校	3	滝野 結菜
「思いやりのキャッチボール」を、皆と	金沢市立兼六中学校	3	吉田 玲花
全力で臨む	金沢市立長田中学校	3	田嶋 桃子
学びのサイクル	金沢市立医王山中学校	3	長嶋 千紗
言葉の暴力	金沢市立額中学校	3	加藤 愛香
言葉で表現すること	金沢市立紫錦台中学校	3	中村 陽翠
環境問題・地球温暖化 少しの意識でできること	金沢市立小将町中学校	3	綿谷 なるみ
誇れる自分を持つために	金沢市立泉中学校	3	森川 周
人との出会いから得たもの	金沢市立浅野川中学校	3	米永 侑加
本当の日本文化を伝えるために	金沢大学附属中学校	3	緒方 杏菜
みんなちがってみんないい	北陸学院中学校	2	荒井 瑞希
笑顔の大切さ	金沢市立緑中学校	3	中森 晴花
世界について学ぶ	金沢市立高岡中学校	3	荒井 夕奈
「大丈夫」は魔法のことば	金沢市立城南中学校	3	山田 桃子
私の日常を取り戻すために	金沢市立高尾台中学校	3	早川 桃子
かたちのない攻撃	金沢市立港中学校	3	米岡 麗那
リスペクトマイセルフ	金沢市立野田中学校	3	北村 忠彰左京
言葉	県立金沢錦丘中学校	3	田原 涼夏
会話で幸せになる	金沢市立清泉中学校	3	田中 心愛
私のお母さん	金沢市立西南部中学校	3	山崎 憂采
大切なこと	金沢市立森本中学校	3	石角 綾香
見落としていたもの	金沢市立北鳴中学校	3	春木 華乃
後悔	金沢市立金石中学校	3	大野 菜摘美
いのち	金沢市立犀生中学校	3	越村 沙和

(4) 令和2年度において、能登地区を対象とする「全能登私の主張発表大会」は中止。

言葉を紡ぐ

鹿児島県 霧島市立横川中学校 三年 池島 音羽

「音羽ってさ、最近調子乗ってるよね。偉そうにさ。まじ、ウザい。」それは、突然のことだった。冬が、静かに足音を忍ばせながら近づいてきたあの日。放課後の教室に冷たい風が吹き抜けた。息ができなかった。ただ、茫然と立ち尽くすしか。心の奥を鋭い刃物でえぐられる。無理に笑おうとすると、頬が引きつった。私、今、どんな顔してるんだろう。真つ白な世界にただ一人取り残された。頭の中に浮かぶのは、疑問だらけ。ついさっきまで、仲良く話してたよね。どうして。どうして私が。私、そんなに調子に乗ってたかな・何か、悪いことしたかな。

その日からすべてが変わった。ひそひそ話をする友人の姿を見ては、その場から逃げ出した。怖かったから。きつと自分のことをいってるんだらうって思った。そそくさと教室を出る私の背中に浴びせられた言葉。

「ほんと何なのけ。ウザいんだけど。」

誰かに相談したくてもできなかった。相談したら、また何かいわれるんじゃないかとおびえる日々。ベッドに横たわって意味もなく、天井を眺めた。頭の中の何かがブツツと切れた。気づいたら側に母がいて、私はすべてを打ち明けた。瞬きもせずに私の話を聞く大きな瞳に泣きじゃくる私の姿が映っていた。

「今まで辛かったね。あんたはすぐに一人で抱え込む癖があるから、誰にも相談できなかつたんでしょ。今、お母さんに言った気持ちをはんの少しでもいいから相手の子に伝えてごらん。何も変わらなかつたら、また、お母さんのところに戻ってきなさい。」

夕飯に出されたお味噌汁を一口すすると、心の中に溜まっていた何かがふつと抜けていった。久しぶりに感じたこの暖かさ。でも、どうやって伝えたらいいの。直接、言える勇氣なんて私にはない。だったら、どんな形であれ、自分の気持ちを伝えなきゃ。だって、私には帰って来られる場所があるんだから。

その夜、私はスマホを握りしめた。LINEを開き、ずいぶんと更新

されていない画面を見つめ、自分の思いをしたためた。何度も何度も文字を打ち直した。私が悪いのなら何がいけなかったのかを教えてくださいということ。陰で言われるのはとても辛いということ。送信ボタンを押す手が震え、どれだけの時間が経っただろう。これがきっかけで何かが変わるというんだらうか。

翌朝、既読のサインは付いたが、返信はなかった。学校についてもいつもと変わらない景色がそこにあった。「ごめん。」背中越しに聞こえた言葉。それは突然だった。伝わったんだ。少しずつ、私の世界に色が戻ってきた。「何か、気に入らないことがあったら、教えてね。」途切れ途切れの私の言葉。

ステイブ・ジョブズ氏は「想いを形にして、想いを言葉にして、想いを伝達する。いくら素晴らしいものを作っても伝えなければいけないのと同じ。」と語る。SNSは諸刃の剣。時に人を傷つけるが、人を救うことだってある。世の中は情報化社会だ。これから先も、私たちは情報の渦の中で生き抜くことになる。何を学び、どんな力を身につけなければならぬか。今、文科省が勧める「GIGAスクール構想」。この目的は、一人一台のコンピューターと、一人一人の個性に合わせた学習の実現だと言われている。多くの情報を活用する力が私たちに求められているのだ。だが、その基盤にあるものは何だろう。どれだけ、情報化の波が押しよせようとも、人間が人間としてあるためには、想いを言葉に紡ぎ、相手に伝えることではないか。そして、人と人がつながること、新しい時代を築けるのではないか。帰宅した私を母が笑顔で迎えた。

「何か食べたいものある。」

私は迷わず答えた。

「お味噌汁。飲みたい。」



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化スポーツ部県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) で検索

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています